

琉球大学学術リポジトリ

南洋に渡った沖縄県出身男性世帯主の移動形態

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮内, 久光 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010148

報告 2

南洋に渡った沖縄県出身男性世帯主の移動形態

宮内久光

沖縄県から南洋への人口移動は、その多くが南洋で農業や漁業、製造業、商業、サービス業などに従事するための移住・移民であり、労働力移動の側面が極めて強い。そのうち、特に男性移動者は、南洋の経済・社会の多くの部門を直接担うと同時に、帝国日本のいわゆる植民地支配の一端をも直接・間接的に担い、現地住民との支配—従属関係を結んだ重要な存在である。そこで、本報告では南洋に渡った沖縄県出身男性移動者に焦点をあて、移動流の空間的側面を明らかにすることを目的としている。

今回は「引揚者在外事実調査票」に記載されている、南洋から沖縄県に引き揚げた者のうち、渡航時に 15 歳以上であった男性世帯主の属性をデータベース化し、これをもとに移動流に関する定量的分析を行った。また、引揚者の移動歴を、具志川市史や金武町史の証言集や、聞き取り調査の結果をもとに復元し、居住地移動や職業移動を考察した。

市町村レベルでみた南洋への移動流の地域的特徴として、沖縄本島中南部市町村からサイパン、テニアン、ミンダナオへの農業移住が、糸満町や本部町そして離島村からパラオ、シンガポール、トラックへの漁業移住という、大きく二つの流れが確認できた。また、移動流を規定する出発地市町村の地域特性を明らかにするため、重回帰分析を行った。その結果、零細農家率や世帯人員の多さ、漁業就業者率の高い市町村ほど、南洋への移動量が多くなることが明らかになった。

町字レベルでみると、県内ほとんど全ての字から南洋への移住が確認できた。特に、南洋の同一地域で同一産業に 30 人以上就業している字を抽出したところ、20 字が該当した。そのうち、漁業就業が 8 字を占め、いわゆるチェーンマイグレーション形態が確認できた。

移動歴、職業歴の分析から、南洋への男性労働力移動の特徴を見てみた。

まず、南洋群島（内南洋）において、農業移住と漁業移住を比較すると、どちらも一人の移住者が一つの島だけではなく、群島内の各島を渡り歩く、という共通点はある。ただし、同一島内での移動をみると、農業者は島内でも頻繁に再移動を繰り返すが、漁業者は漁港に近い特定の地域に集住する傾向にある。また、農業者はサトウキビ栽培の日雇い労働に従事する者が多く、一部には南洋興発の準小作や現業員、他産業へ転出した者もいた。これに対して、漁業移住者のほとんどは漁業就労のままで職業を継続する傾向にあった。

これに対して、外南洋のフィリピンへの農業移住においては、主にミンダナオ島ダバオへの移住がほとんどで、フィリピン国内の各島への再移動は多くない。また、入植後に島内を再移動する者も少なかった。

南洋への移住は漁業者の存在に特徴があり、今後は漁業移住の研究も必要だと思われる。